
小さな螺子巻き

小羽 朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな螺子巻き

【Zコード】

Z2908D

【作者名】

小羽 朔夜

【あらすじ】

彼方此方に散らばる螺子を拾い上げてみる。それらにもどんなに小さくても意味はあるのかもしれない。“神様の螺子巻き”小説集です。

林檎に関する考察（前書き）

今回は智仁君視点で。時期としては彼が名前で呼び始める前です。

“鏡よ鏡。世界で一番美しいのはだあれ？”

“白雪姫でござります”

それは本当に？果たしてどちらが罪深い？

天の岩戸は今日もしつかり閉まっている。どうやら、いつも通りに立腹らしい。毎度逃げるようになつて、いく俺にも原因はあるだろう。自分を守るように、世界を拒絶するよう繰り返されるそのことが彼女をより堅固に閉じ込めているようで、何だか自分のふがいなさを思い知らされる。だから。

“すゞ～役者は足りないけど、とりあえずチエシャ猫が踊ってくれるから、ちょっと垣間見ちゃつたりしちゃわない？”

無理矢理にでも、自己満足でも引きずり出してやるつと思つた。いや、明らかに俺の力じゃなく、チエシャ猫の力だけ。恨めしそうな視線（まるでそのうち喋りそうなくらいだ、そうなつたとしても俺は驚けない）が刺さるが気にしない。今は彼女の隙につけこむしかないのだから。

そろそろと窓を開けているのを眺めやり、少し複雑になる。未だ俺は警戒されているのかと。それは当たり前なのかもしれないけれど、此方を知らないことを残念に思いながら。それでも圧倒的に安堵が勝っていた。俺もまた逃げていることを彼女は知らない。

“やつぱり、そんなことはないかもね。期待して損した。”

そつ言つと彼女は窓を閉めた。鍵は交わないまま。全く素直じゃない、と笑みが溢れた。

“ねえ、アリス。もし、君が世界で一番美しいって言われたら何を想う？”

“だからアリスじゃないって言つてるのに。まず、その人の正気を疑うんじゃない？それから、逃げる。だつて私がそれほど綺麗だとは思わないもの。もしたとえ私が世界に独りだつたとしても、私より美しいものしかないんだし。そんなこと聞いて楽しい？”

冷たい眼差しが刺さる。でも、彼女の場合、綺麗というより可愛いんだと思う。顔立ちも性格も。

“そっかあ。別に眠る彼女も、継母に殺されそうになつた彼女も綺麗に見えただろうけど、世界で一番美しいとは言い切れなかつたんじゃないかと思つただけだよ。

全くアリスはチェシャ猫を疑えば良いのに、よりによつて時計ウサギを疑うなんて。ダメだよ~話が続かなくなつちやうから。”

“チェシャ猫の何処を疑えっていうの？貴方の方が100倍怪しいんだけど。”

“でも…私もそうだと思う。彼女達を疑う訳じゃないけれど。周りに御膳立てされてしまつたんじゃないのかつて。流されるままに生きているだなんて。何れ程愚かなんだろうって。”

そこまでひとりごちるよつに言つた後、やつと彼女は気付いたらしい。自分が誰と話しているか。

わなわなと震えながら赤くなつた顔を反らしてしまつた。きっと、自分の浅はかな発言を悔いでいるだろう。半分は自分に對する怒りだらうが。

“ そうだね、でも彼女達は。特に白雪の方は。仕方なかつたと思うよ。彼女は自分が如何に美しいか、それが周囲…この場合は継母だけど。にどんな影響を与えるか知らなかつた。だから、抵抗する術もなくされるままに逃げるしかなかつた。

お妃の嫉妬もアレだけど。娘を3度も殺そうとするなんてね。でも、彼女の感情も分からなくはないし。”

彼女が此方を見た気がした。けれど俺は窓の外を眺めやりながら話を続けた。今振り返ることは彼女のプライドは許さないだろう。

“ だから…本当に、罪深いのは鏡。ヤツの判断で2人の人生が狂つた。意図的か無意識かは分からないけど。ヤツは白雪に、継母の林檎なんか可愛いものだと思えるような、十分致死量に足る猛毒を盛つたんだから。『孤独』という名の。これは許さないし、許すべきじゃないと思うな。

もしかしたら、鏡は隣国の王子の演じるところだつたりしてね?めでたし、めでたし。”

本当に笑わせてくれるよ、『彼』は。

“ どうして?どうしたの…急に。”

彼女の顔はきっと青ざめている。流石に、どうして、俺がそんな話をし始めたか感付いただろう。

“ ちょっと考えてみただけ”

きっと鏡は美しいものに憧れて。手に入れたかったんだよ、その存在を。全く皮肉だよな、欲しいから自分で付けた傷を自分が癒す為に彼女の側にいる。可哀想な彼女は何も知らないまま。知らなければ愚かでさえない。

でも、君はアリスだから。そんなに怯えなくても、精タイモムシにキノコを勧められるくらいで済むんじやないかな。”

にっこり笑つて振り返ると泣きたいのか怒りたいのかどちらにしろ何か言いたそうな彼女がいた。仕方ないから今日はもう一人にして

あげよつと思つた。

大丈夫だよ、君は悪くないんだから。

林檎に関する考察（後書き）

“孤独”って本当に中毒になり易そうだと想つたことから出来たお話。
鏡イコール王子説は気に入らない方もおられると思いますが、『』容赦下下さい。

11月まで読んで下さりありがとうございました。

夢の国での邂逅（前書き）

地の文より会話文の方が長くなってしまった。
時期は本編終了後？

夢の国での邂逅

““あの人にはそんなつもりはなかったのだろうけれど、脳に、耳に、瞳に。あの人への残滓が消えてはくれない。

あんなに優しい眼差しを。こんなにも甘く耳朶に触れる声を。忘れて。忘れて。忘れて。忘れて。

でも、何時までも覚えていたかった。

どうして私の耳はあの人声を拾つてしまつの？

それはね…

どうして私の口はこんなにも溜め息を奏でているの？それはね…

どうして私の鼻はあの人残り香を求めているの？
それはね…

どうして私の瞳はあの人姿を追うの？

どうして足はあの方へ向かうの？腕はあの人を抱き締めた
いの？

それは…私が＊＊＊＊＊を好きだから。私は貴方を愛するた
めに、貴方を愛するが故にこうして産まれて来たの。私は貴方さえ
居てくれたなら何也要らないわ。だから、私を愛して。瓶なら、悪
い魔法なら貴方を縛る鎖は既に解けているのだから。

この世に貴方がいなくなつたり、たとえ出逢わなかつたとしても。いつか貴方に辿り着くから。だから。

私をずっと傍に置いて居て。たまには嫌がつたフリして逃げてあげるから。ほどけない鎖で縛りつけておいて。離れられないよう、他のモノが目に入らないくらいに。」

…つてすゞに言われる夢を見たんだけど。」

今までずっと窓辺で寝ていた（私はいつも落ちるかと気が気がではなかつた。）彼は起きた途端にそう言つた。

「だから？」…………。すずチャンが冷たい夢じゃ、あんなに潤んだ瞳ですがつてきてくれたのに！あれだけ素直になつてくれたらなあ。」

別に嘘だとは誰も言つてないけどね、と心の中でだけ言つてみる。まさか聞こえてたとは。恐るべし、ジンの聴力。今度からは時と場合と場所をきちんと確認してから言わないと。ＴＰＯはこういう時こそ大切だと思った。

「夢でも見たんぢやない？時計ウサギの癖に。大変だよね、寝ながら遅刻しないように走るのつて。」

「だよね～前に俺、寝ながら学校行つたらしくてさ。なんか、気付いたら授業中だった時があつたんだよ。あれにはびっくりだね。チエシャ猫も起こしてくれれば良かつたのに。」

あ、でも夢見る男つてカツコよくない？やつぱり俺は何しても似合つちゃうから。そんな顔しないでよ、そつは言つてもすずチャンの夢見る乙女には敵わないからさ。だから、時計ウサギもチエシャ猫もつい惚れちゃうんだよ。

…そう思わない？アリス

ヤツは悪戯が成功したかのように勝ち誇った顔をしていた。もしかして、バレてる？いや、でも、まさかそんな。いつも肝心なところばかり鋭いし。

…とりあえず知らないフリをしておくことにした。

“それはね…

私は貴方が大好きだから、だよ。

親愛なる時計ウサギ様

アリスより愛を込めて”

夢の国での邂逅（後書き）

やたらと甘い話が書きたくなつたせいでこんなになつてしまひました…
最初は夢オチだった筈なんですが、途中から智仁が冷たくあしら
われすぎて可哀想になり、路線変更となりました（苦笑）
彼が気付いているか、いないかは読者様にお任せします。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

棘の刺さらない距離

いつもより早くすずの家に着いたら、珍しく彼女は寝ていた。（とは言つても、パジャマ姿でベッドでないのが惜しまれる。）

本を読みながら寝てしまつたようで、あどけなく眠る姿にはいつも過剰な程の警戒心は見受けられなかつた。これが強がつていない、本来の彼女なのだと思う。誰の前でもこんな無邪気に過ごさせていたら、今以上に皆が惹かれるだろうに。今の彼女だからこそ俺が近付けたのだから、あながちそちらの方が良かつたとも言い切れないが。

じーっと眺めていたら衣擦れの音がした。視線を感じて起きたのかと伺うとそうでもないらしい。俺達が入つてきた窓からの風がちょうど顔に当たつていたようで、少し身動きするとまた眠りに落ちた。気付いて欲しい、彼女の眠りを妨げたくはないのに。俺は一般人だけど、起きては下さいませぬか、眠り姫？

…彼女が眠りについてから何百年も経ちました。城を覆うようにたくさんの荆が生え、人が近寄ることすらもままなりません。そんな時、1人の若者が現れました。

物語の中の彼女は何を思つたろう。何百年もの間中眠りについたまま、自分を助けに来てくれる者をひたすら待ち続け。彼女に選択肢は与えられない。

助かるのを待つていたのか、誰も近寄らないように荆で覆つてしまつたのか、分からぬ。彼女はどうして欲しかつたのだろう。

来て欲しい？それとも何も気付かないまま眠り続けさせて欲しい？

今、目の前で眠る彼女なら何と言つだらう。

「……傍に、いて…独りは嫌。嫌なの…」

ふと微かに声が聞こえた気がして耳をすましてみる。何も聞こえないがつた。当たり前だ、彼女が助けを求める筈がない。きっと気のせいだつたに違いないと思ったその時、彼女の頬から一筋流れた。

きっと寂しくて、誰かにいて欲しくて。そのくせ、人が信じられなくて近すぎる距離を拒絶した君はどちらの願いを選ぶことも出来ないままだつたんだろう。でも、大丈夫だから。折角の荆を傷つけもしなければ、門を抉じ開けることもしない。ただ、お姫様が自分から目覚めて外に出てくるのを待つてゐるから。そろそろ起きて頂けませんか？

：あのまま結局すずの傍で寝てしまつたらしく、仏頂面のすずに殴り起こされた。彼女曰く、不覚にも寝顔を見られたことに立腹なんだとか。可愛かったよ、と呴いてみたら今度は蹴られた。寝顔見ただけでほっぺにキスすらしてないのにこの扱いはちょっと酷い気がした。

“大丈夫だよ、ずっとずっと待つてゐるから。”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908d/>

小さな螺子巻き

2010年12月7日15時11分発行